

(論 文)

高田保馬の学問と家郷三日月村 —弱きものための「耐乏」の思想—

吉 野 浩 司*

はじめに

本稿の目的は、高田保馬の生まれ故郷の風土、それからそこで暮らす父母、兄と姉、親戚、朋友、村人たちに対する思いを紹介するとともに、それらが彼の学問のどのような部分に反映されているのか、について考えてみることにある。人の思考というものは、生まれ育った環境に、大なり小なり制限されているものである。高田の思考の枠組みを強く規定しているのは、佐賀の風土である。彼についてこれまで書かれてきた書物や研究論文は少なくないものの、故郷が彼の思想と学問に与えた影響力について言及したものは、ほとんどない。そこで本稿では、高田が残した、数多くの随筆や一般向けの論説の中から、佐賀についての風景描写と、そこで培った家族、師友との関係について抜き出し、それが高田の学説の根幹にかかわる部分において影響を与えているという事実を明らかにしたい、と考えている。佐賀県小城郡三日月村（現、小城市三日月町）という家郷がなければ、のちの高田保馬は存在しえなかった、というのが本稿で導き出したい結論である。

I 問題の所在

高田保馬は、日本の社会学と経済学の黎明期に、西洋の学説の吸収と普及に、多大な貢献を行った。また、それだけでなく、西洋の社会学と経済学を踏み越えた、独創的なアイデアを提出したことも、改めてここで述べる必要はない。ただ、いくつかの具体例については、挙げておいたほうがよいであろう。社会学では、「結合定量の法則」をキーワードに、階級、社会集団、多元的国家、東亜民族、世界社会といった多様なトピックに切り込んだ。人口論では、日本がまだ多産多死の時代にあって、産児制限どころか、それと対極にある「産めよ殖えよ」という人口増加政策を唱えた。経済学では一般均衡論の中に、「勢力」概念を埋め込むことで、より現実に近い理論を構築しようと試みた。そうかと思うと、これから日本経済が発展していこうとする中で、それとは真っ向から反するような貧乏論を説いた。これらは、単に独創性というだけではすまされない、彼特有の、ある種の情念のようなものが感じられる、と筆者には思われる。西洋社会をモデルとし、西洋の学問に追従することだけに甘んじることのできない不屈の情念、それは、いったいどこからくるのだろうか。

国内外の先端的諸学説を理解し、まとめ、欠点を見つけて、それを乗り越える、というのは学問の常道であろう。しかし高田の独創性には、どうもそれだけでは片づけられないものがある。彼の

* 鎮西学院大学現代社会学部教授

著作を読んでいて、ときに非合理的なことを、あえて主張しているかのような場面に、しばしば遭遇する。あえてというより、むしろ、どうしてもそう主張せざるをえない情念が、そこにはある。その象徴として思い出されるのが、やはり太平洋戦争の敗戦後、教職追放の処分を受けた顛末である。帝国大学の多くの学者が、言論活動による戦争協力を理由に、GHQの指導に従い公職追放処分を受けた。高田は、その判定理由の不当性を必死で訴え、やっとの思いで判定そのものの取り消しを勝ちえた。この逸話は、それ自体として見れば、実によろこばしいことである。しかし結局のところ、審査の無効が認められたのは、他の多くの公職不適格者が追放を解かれた時期と同じ、サンフランシスコ講和条約後の昭和27(1952)年であった。戦時には、積極的に翼賛的発言を繰り返し、戦後は反論も反省もせず、ことのなりゆきをただ静観していた人々たちの処遇と、高田の待遇とを比べてみても、表面的には何ら変わるところはなかった。高田が受けた審査を無効にするための運動の辛苦と、獲得しえた結果のつつましさとアンバランスさがきわだっている、と傍目には映る。たとえ高田にとっては、それだけで満足であったとしても。

こうした、ぬきさしならない情念を感じさせる異論や反論、ときに非合理とも思われかねない極論の表明の根底にあるのは、いったい何なのか。その答えを探るためには、まずは高田をはぐくんだ故郷の原風景・原体験の中をあたってみる必要がある。その情念に支えられて、彼の独創性が発揮されているのだということが、やがて判明するだろう。高田の家郷での生活、そして佐賀中学での師友との交流について注目しようとする本稿の意義は、まさにこの点にある。

Ⅱ 高田保馬にとっての郷里三日月村

佐賀県小城郡三日月村は、佐賀平野の西の端に位置する。市内を流れる嘉瀬川からは無数の支流が分岐し、それらが有明海へと注いでいる。支流は、縦横に張り巡らされたクレークで結ばれ、大規模な稲作農業に欠かせない、ふんだんな水を運んでいる。身は京都にあっても、きまって高田が思い浮かべるのは、そういう田園地帯の風景であったろう。

水郷の三日月村では私の小字だけでも幾條かの堀割がある。〔略〕その上半切といふたらしを浮べて村の女達が採る菱が今〔9月～10月ごろ〕丁度出盛りである。それが毎夕各農家の食膳に上つてゐるであらうか、それとも此逼迫した時勢〔昭和18(1943)年〕のことであるから供出してしまふかも知れぬ。菱が出る頃は畑にいろいろなものが出る。木綿は全くすたれてゐたが、時代の必要につれて再びあちこちに植付けられてゐるといふ。日ぐれになるとあの寂しい黄色の花が皆疲れ切つて萎んでゐるであらう。夜になるとあちこちの里芋畑の芋葉に一面の露が上る、今頃本をよみやめて村から少し離れた畑の中を散歩すると、芋明月の青い光が方々の芋の廣葉から反射して来る。(高田, 1947, 2頁)

このような自然と、素朴な田舎の風景にとりかこまれ、高田は、どのような理想社会へと向かう思想を培ったのだろうか。彼が本心から望み、理想としていた社会は、草花の匂いのする有機的な共同体である。しかし高田が思い描く理想社会とはうらはらに、現実の社会は、それとは正反対の方向に進んでいる。合理的で、計算されつくした、人工的で、利便性に富む社会である。高田はそれを「理化化」、「利益社会化」という不可避、不可逆の流れであると受け止めていた。この理想と

現実とが交わるところで、高田は思索を深めていった。

はたちまでを三日月村の生家に暮し、他郷に出てからも毎年老母の許に歸つてゐた私〔高田〕にとつては、あの鵲がなき交し、菰の葉のそよぐ寒村が何よりもなつかしい。そこでの生活の追憶はいつも私の心の中に生きてゐる。〔略〕社會の進展の前路に私はいつも利益社會化の姿を想望した。それにも拘らず、私は魂に於て望郷の兒であり、農村の子である。それだけ共同社會的なるもの、人情淳朴の村落生活にあこがれをもつてゐる。生馬の眼を抜くといふ都會の生活のさ中にありながら、私の心はたえずゲマインシャフトを求めてゐる。而もこの氣持こそはやはり廣き郷土としての祖國を、日本を思念せしめてゐるのである。(高田, 1941, 2~4頁)

思念の果てに案出された結論は、虚飾を避け、現実に必要なものを必要なだけ使う、「農村の生活習慣」と「低き生活」をモデルとする社会であり、それはまた、不条理で過酷な運命の采配にも忍従し、耐え抜く意志を有する社会であらう。そしてそれは、彼自身の実体験からつむぎだされた思想であったことは、いうまでもない。

私にとつて郷里はいろいろの風物の綜合であるばかりではない。私はこの農村の中に生活し、農村の中に人となつた。早く父を失つて母親だけに育てられた私には氣の弱いところがある。それでも友達はすべて久しき傳統を受けた負けぬ氣の所有者であつた。農村は私に生活の仕方を與へ、友人達は私にふみこらへる道を教へてくれた。私が早くから低き生活の主張をもちつづけたのも、長き生活習慣を都市に入つてなほ棄てることが出來ず、周圍からの思想暴力ともいふべき非難と壓迫には屈しまいとした態度の結果に外ならぬ。郷里は私の身體を一細胞の末に至るまで作り上げてくれたであらう。(高田, 1947, 3~4頁)

「身體を一細胞の末に至るまで」とは、何のてらいもない、確信に満ちた、素直な心情の吐露であらう。郷里の生活で得たもののすべてが、血となり肉となり、それが思想に昇華している、というのである。理化化、利益社會化へと突き進んでいく現状に対し、高田が提示した生活指針は、しかし常人が思いつく解決策とはほど遠い。社会をよくするために、あるいは幸福な社会を建設するために、一心不乱に生産力の増強にはげむ姿勢とは、まったく異なるものであつた。

生産力の増加、これ實に現代文明の套語たり、標的たり。然れども畢竟これ世界的一大迷妄のみ、今の文明は彼岸の帝郷^{もと}を覺めてたゞ天上その蜃氣樓を見たり。眞に幸福を覺めむとせば、針路は全く誤れり。急務は生産力の増進に存せず、貧富の懸隔を大ならしむるに存せず。たゞたゞ如何にして享樂の不平等を減少せしむべきかにあり、如何にして全民衆をして相共に樂ましむべきかにあり。(高田, 1923, 376頁)

雑誌『藝文』に發表された「文明の迷妄」の中の一文である。引用文中のはじめにある「生産力の増加」の語は、初出では「あゝ繁榮」となつてゐる。高田が京都帝国大学に入学し、論文を發表するようになったばかりころの文章である。文明のめざすべきところは、たよりなく揺らめく、しかしこの上なく魅力的な、「蜃氣樓」のような「繁榮」に、うつつをぬかすことなどではないはず

だ。「贅氣樓」のような「繁榮」ではなく、「眞に幸福」な社会をこそ、めざすべきである。それには、生産力の増強でもなく、階級格差をなくすことでもなく、ひとえに「享樂の不平等」を解消することが、達成されなければならない。明治の末年、高田が社会学の道を究めんとする、まさにその時に発せられた、決意表明であると受け取っていいだろう。この時、農村の生活から生まれた高田の思想が、ひとつの実を結んだ。

「享樂」を独占することを目的とし、それを駆動力とするのが、資本主義社会である。それに対し、高田が考える幸福な社会とは、「享樂」を平等に分配する社会である。人間であるかぎり、享樂や贅沢を求める欲望を、否定することはできない。ならば、せめてそれらを人類が平等に享受できるようにすることで、理想的な社会の建設に貢献できるのではないか。「享樂」が平等に分配された時、人間の欲望は抑制され、節度ある社会が実現される。これを逆に表現するなら、「道徳としての貧乏」（高田、1940、120～155頁）ということになる。高田がめざす理想的な幸福な社会とは、つまるところそういう、つつまじやかなものである。

高田は、とことんまで理論を探求するタイプの学者ではあった。しかし、その探求の先に見据えていたのは、人類の幸福な未来である。そして、その人類の代表として、いつも高田の脳裏を占めていたのは、あの郷里を同じくする近親者であり、師友であり、村人であった。どのような人々に囲まれて高田は育ったのであろうか。

Ⅲ 高田保馬の親族たちのこと

まずは母方の家系から、見ていくことにしたい。高田が生まれ育った小城市の隣に、武雄市がある。市内には、樹齢何千年ともいわれる巨大な楠のそびえる、若木町がある。高田の母クスは、そこで生まれた。当時は、杵島郡川古村と呼ばれていた。

私共の祖父は楠宮内〔正しくは楠宮成〕（くない）。もと坊籍にあったから、此楠姓は明治のはじめに称したものであろう。明治の末頃八十歳を以て歿してゐる。代々此川古に住したが、後故あって一里西の桃の川にうつって、村の神職をつとめてゐた。三人の女子があった。長女は私の母〔クス〕、川古から六里はなれた高田〔清人〕に嫁いで二男三女を生んだ。大正十一〔1922〕年八十二歳まで存命。次女〔ハマ〕は隣村久本の池田〔轍〕に嫁いで三男一女を生んだ。明治三十三〔1900〕年歿。此三人兄弟の中、池田秀雄一人丈け残存。宮内〔宮成〕の三女は家に残って多久から養子を迎へたが、男子二人。弟の血脉はたえ、兄のあとは消息を絶てゐる。（高田、1957、96～97頁）

川古の大楠の、地を張って伸びる太い根もと部分には、ぽっかり空いた空間があり、そこには稲荷が祀ってある。かつてはそこに、観音菩薩が鎮座していた。現在、その菩薩は、すぐとなりの観音堂に移されている。移されたいきさつについては、この高田の母方の楠家との、深い因縁がある。

私〔高田〕の兄清俊は伊勢四日市に眼科医を営んで大正七〔1918〕年に世を去ったが、私と兄弟相向って酒をのむと「川古のおぢいさんはね、大楠の中の行基作の仏像の顔面を削ったから、家が絶えるよ」といつてゐた。神職であった祖父は明治の初年、廃仏毀釈の風潮に従つ

て、一方からいふとそれに忠実に、他方からいふとまことに遺憾なことではあるが、削り取ってしまった。ただ誠実温厚の人物が認められたのであらう、村内の方方は今日までも厚意をよせて下さることを思ふと、心から感謝しなければならぬ。(高田, 1957, 97 頁)

祖父の実直な性格が想像できる。同じ坊籍の家系ということで、高田の父と母は結婚することとなった。高田は、父母がかなり歳をとってからの子ということもあって、特にかわいがられて育った。高田も甘えるというわけではないが、母のことを、終生たいせつにした。それは中学への通学の方法、あるいは高校進学の学校選びにも反映している。母は高田にとって、次のような存在であった。

中学五年、往復五里〔約二〇キロ〕の道を通学しつづけたのも、私〔高田〕一人に全身の慈愛を注いでくれた老母に別れたくないからであった。〔明治三五（一九〇二）年〕九月のはじめ、さいわいに入學して熊本に向うという日には、朝早くまず家をでてから濠に沿うて道を回った。門先に老母と送別のためにきて泊っていた三人の姉は、しきりに身振りを示している。そのかたわらには百日紅の老木が咲き盛っているのが見える。わずか四時間で往復できるのに、涙とどまらぬという感傷も血縁の深さのゆえである。秋風に吹かれて野を行く青年はいくたびかふりかえった。母子四人はいつまでも家に入らぬ。五十幾年、追憶はなおあでやかである。(高田, 2022, 10 頁)

少しでも母の近くにいたいという理由もあって、高田は熊本の第五高等学校に進み、京都帝国大学を選んだ。そればかりか、教員になってからさえ、海外に行くという選択をあきらめた。

私〔高田〕共の年輩の、而も外國輸入の學問をやつてゐる學究で、歐洲やアメリカに行かないものはない。〔略〕實をいへば、行きたいと思ひ、行くべき機會も一度や二度ではなかつた。〔略〕しかし私だけをたよりにしてゐる老母を置いてたつことが辛かつた。その後の機會には母も益々老い、私の健康も衰へてゐたので殆どそれを考慮にも上せずすんだ。(高田, 1950, 23 頁)

その母親の性格は、高田の描写にあるように、弱きものへの感受性と共感力に富む人のようである。貧乏のこと、農村のことを第一に考える、高田の思想信条と重なり合うところが、ひじょうに大きい。

母はあまりにも涙脆い性分であった。近所に病人ができると、一家のものでもあるように心配をつづけていた。ラジオの流行歌にさえ涙を落す私〔高田〕の性格も、そこからきているかも知れぬ。もうひとつ忘れがたいのは、私の近所はすべて小作農ばかりであった。一部落二〇戸、たいていは小作であるのみか、明治のそれは地主の圧力によって気の毒な生活をつづける外はなかつた。私の家は豊かであるとはいえないが、近所の家についてその様子を知ると、多感の少年はいつも胸が痛んでいた。(高田, 2022, 7 頁)

高田と同世代の学者は、士族、財閥、豪商、官僚の縁者であることが多かった。その中にあって高田は、半ば寝たきりの父、農業によって家を支える母と、それを見守る兄姉、農業を手伝ってもらっている数名の小作人たち、そして近隣の貧農家たちにとりかこまれて育った。だからこそ高田の考える社会学、経済学とは、そういう人々を守るための学問でなければならなかったのである。

つづいて、高田の父について見ていこう。父の存在は、母と比べると、比較にならないほど、おぼろげなものであった。それは高田の幼少のころから、すでに父が病身であったことからきている。

今から考へてみると、私〔高田〕は父の五十のときの子である。父が六十五歳で世を去つたとき、私は十六歳の少年であり、中學の二年生であつた。十六といへば十分物心ついてゐるやうであるが、私は父のことをさうはつきりとは記憶してゐない。〔略〕父は五十九歳で一度脳溢血になり、一旦は快癒して六十一歳のときに再發、それからは半身不隨の身となり、僅かに一町位の距離を歩くだけで言葉も不自由勝であつた。さうして六十五歳のとき肺炎で亡くなつた。明治三十一〔1898〕年六月のなかば、柿の花の咲くころ、私は走つてそれを親戚に通知したことを覚えてゐる。(高田, 1941, 12頁)

幼い時から登って遊んだ柿木の花が、この回想の中に織り込まれているのも、印象的である。高田の家郷の記憶は、つねに山川草木とともにある。

ともあれ、長らく病床に臥せていた父だが、そうなる前の父は、古くからの修験者の家系ということもあり、他方、漢方薬の処方もでき、かなり村人から慕われた、丈夫な体躯の持ち主であつたようである。また数学の得意な、理知的な人であつたという。

病氣のまへは決して感情家ではなく、むしろ理知的の性格であつた。〔略〕興味は何よりも算数の學にあつたらしい。八つのとき、學校で習つただけでは分りにくかつた算盤の乗除算を父から習つた。學校でどうしても頭の中に入らなかつたものが一度にはつきりしたと思つた。(高田, 1941, 12頁)

父についての記憶がおぼろげなのは、このような長い間、闘病生活にあつた父の姿のほかに、思い出すことが少なかつたからであろう。それに対し、元気なころの父を知る兄、清俊の方は、生前も死後も、父に対する畏敬の念を、決して忘れることはなかつた。

父が中風になつたとき、兄は急いでかへつて來た。さうして電氣治療の機械と安樂椅子とを買つて來た。歩行の不自由な父はよく、木の蔭にもち出したこの椅子によりかかつて外の様子をながめ、長時間をすごしてゐた。(高田, 1941, 20頁)

日々、体の不自由な父と暮らしをともにせざるをえない高田と、遠い異郷の地から安否を気遣わざるをえない兄との境遇の差が、父に対する二人の想いの濃淡を決めているのかもしれない。いずれにしても周りの人を常に気にかける、人情味あふれる母と、算術にたけた理知的な父にかわいがられて育つたというのが、高田の父母に対する変わらぬ感情であつた。

それでは最後に、高田の兄との交わりについても、簡単に触れておきたい。高田にとっての兄とは、どのような存在だったのかがわかる文章を、高田は書き残している。

兄は私〔高田〕とはちがつて才氣煥發でもあり、又裁決流るるが如しとでもいひたい事務の才能ももつてゐた。母の言葉によると私など足許にもよれぬ人間であつたといふことであるが、當時の青年たちが喜んで學んだ法學にゆかず、父の考へに従つて醫學をやつて、而もそれが東京大阪といふ大都會にも出ず、明治二十三、四〔1890、1〕年から伊勢四日市の田舎町に町醫者としてくすぶつた爲に、如何にも不平でたまらなかつたらしい。(高田、1941、16頁)

この兄は、若くして父を亡くした不憫な弟、保馬のために、父代わりとなって振舞った。弟のために、書物を買ひ与え、大学、留学のための資金さえ、積み立てていたという。

Ⅳ 池田家の人々

以上のところで、高田が、どのような家庭環境のもとで育ったのかが、おおよそ、つかめたであろう。次に親族へと範囲を広げて、叔父ならびに従弟との関係について触れておきたい。最初に取り上げたいのは、叔父・池田轍についてである。

私に最も強い感化を與へた舊師としてはただ一人を語るべきであらう。それは小學校時代の教師でもあるがまた私の叔父にも當る池田轍訓導である。〔略〕謹嚴溫厚そして寡黙、用がなければ容易に物を言はぬ、喜怒哀殆ど色に出ぬ落ちつきすました人であつた。朝夕、居間の火鉢のわきに端坐して一年中其姿を微塵だもくづされたのを見たことはない。いつも横に机を置いて漢書を讀む姿が眼の前に浮んで來る。(高田、1947、20～21頁)

いかにも明治時代の地方の知識人の風格を漂わせた人物である。高田をして「強い感化を與へ」、
「舊師としてはただ一人」とまでいわしめた、この叔父の指導方法を知る、恰好のエピソードがある。

私〔高田〕の九歳か十歳の頃であらういつか寝ころんで澤庵をかぢりながら國史眼といふ本を讀んでゐた。その時叔父から低い静かな聲ではあつたが、「保しやん、その本をねてよんでよいかの」と問はれた。私は全身の血が逆流するやうに覺えた。その後は何も注意を受けることもなかつたが、私には世間の道德といふものが此叔父となつて私に無言の監視をするやうにさへ思はれた。(高田、1947、20～23頁)

おそらく高田が學問というものの厳しさを痛感した、最初の経験であらう。爾來80年、高田がたゆむことなく、書を読み続け、文字を書きつづけるという生涯をまっとうすることができたのは、この「無言の監視」によるものといえよう。

この厳格な叔父の子ども、高田から見ると従弟にあたる人物に、池田秀雄がいた。ある意味では彼が、高田を社会学へと導いたといつても過言ではない。高田より先に第五高等学校で学び、明治

42 (1909) 年に東京帝国大学法科大学を卒業する。卒業後は、朝日新聞社、拓殖局書記官、長野県理事官、広島県理事官、宮城県視学官、岐阜県警察部長、外務事務官兼内務書記官などを、転々とする。腰が落ち着かないのは、高田と似たところがある。不器用でまっすぐな意志は、多くの場合、日常生活での衝突と屈折を生む。

その後の池田は、大正 13 (1924) 年 6 月に秋田県知事に就任したかと思うと、同 12 月には、朝鮮総督府の殖産局長となる。昭和 4 (1929) 年 7 月に北海道庁長官となり、退官後は京城日報社長に就任する。昭和 7 (1932) 年 2 月に佐賀県第 1 区から立憲民政党として出馬し当選してからは、ようやく政治家として落ち着いた。戦後は、大政翼賛会の推薦議員であったため、公職追放の対象者となった。

高田にとって実の兄である清俊は、親子ほど歳が離れていたため、この池田が、兄代わりをつとめた。

池田の従兄は万事につけ弟のように面倒を見てくれた。早熟の読書人であって中学のころから仏典をよみ、その兄の蔵書の中にある有賀長雄『社会学』のことなど話していた。これが後年、私〔高田〕の社会学に進む、ひとつの因縁をなしている。少なくともさように私は考えている。(高田, 2022, 12 頁)

高田はこの早熟な従弟の導きにより、社会学への足を踏み入れたことを、いろいろなところで回想している。

従兄(池田秀雄氏)が文科をやるなら社会学をやりたいなといつてみた。これは従兄が読書家であり、有賀長雄氏の社会学の本などをよんでゐた影響であるらしい。有賀氏の学問はスペインアにつながる。結局此示唆が私に強く作用した。(高田, 1949, 25 頁)

以上が、高田の記憶をたよりに再現した、高田家の人々、親戚の人々、そして彼らを取り巻く自然の風物である。これらが彼の思想の根の部分を形成しているといっていだらう。この土台の上に、青年期の高田は師友関係の幅を広げていく。それは学者高田保馬の精神的基盤となっているものである。中学時代における交友関係、師弟関係の中で、特筆すべきは、ある学生団体のことである。

V 中学時代の誠友団

高田は、実に回り道の多い人生を送った。その原因を作っているのが、青年時代の経験にある、という自覚が高田にはあった。戦後になって、自らの来歴を自伝にまとめる機会を与えられた高田は、その回り道の起点ともいえる、中学時代から説き起こしている。それはまた、高田がなぜ社会学から経済学へと進んだのかの回答にもなるのだという。

中学以降、高田の精神的支柱となったのは、おそらく彼が中学時代に所属した、誠友団という特異な団体であろう。高田の自伝は、この団体についての記述から始まっている。

明治三二（一八九九）年のあるころ、同級生の二人が奮起して、修養と思想との会を作り、一〇人あまりを糾合した。上級生、下級生も少しあったが、中心は当時の三年生である。二人の発起人がまず考えたのはその指導者であった。そうして中学の所在地佐賀の弁護士、のちの改進黨系の代議士・豊増龍次郎氏に願った。〔略〕私〔高田〕ども少数のものはそれによって深い影響を受けている。それとともにこの会が当時の母校〔旧制佐賀中学〕の気風のある面を代表していることを思うと、これを説くことは私の中学高年級時代を語ることになる（高田、2022, 4 頁）。

この誠友団に関する、もっとも詳しい記述が、別のエッセーの中にある。『貧者必勝』の中に収められた、「誠友團回顧」および「誠友團回顧追録」の二編である¹⁾。それらをもとに、この団体の概要を、ここに再現しておきたい。

山田陽一という早熟、聡明な学生が、高田の同級生の中にいた。彼が会の発起人である。明治 32 (1899) 年の暮れ、山田が一種の修養団体を作ろうと、高田および数人の同級生に呼びかけた。二人は旧制中学の三年生であった。会員は同級生の他に、上下の学年からも集められ、最もさかんなときには、17, 8 名にもなった。当初の目的は、親睦と弁論の練習であった。明治 33 (1900) 年 2 月から、弁護士の豊増龍次郎が顧問に迎えらる。豊増は私邸を、会のために開放し、ここに精神的修養という目的が新たに付け加えられた。4 月には、柳川中学にも姉妹団体ができ、柳川、諸富、佐賀での会合を行っている。10 月に、佐賀に両団体であわせて 20 名が集い、正式に、誠友団を名乗るようになった。団体名の由来は、伊藤博文の立憲政友会をもじって命名されたものである。山田の発案であるとされる。

會の空気は大體、天下國家を旨ざしてゐた。松田〔正久〕、尾崎〔行雄〕、島田〔三郎〕、犬養〔毅〕などの政客の噂でにぎはつた事もあつたと記憶してゐる。團員の人物の相互批評を書いた。（高田、1934, 29 頁）

顧問の豊増龍次郎は、当時、30 歳前後の少壮弁護士であった。代議士になったあとの豊増は、明治 41 (1908) 年に戊辰倶楽部、そして明治 43 (1910) 年に立憲国民党に加わった。いずれの政治団体も、反立憲政友会の立場の組織である。

明治 34 (1901) 年 5 月の誠友団の会合は、おおいに盛り上がった。江藤新作が講演をすることとなり、先述の池田秀雄も山口から駆け付けた。その時の、豊増邸の中庭で撮られたと思われる集合写真が、今でも残っている。しかし、同年 8 月までの記録があるが、その後は途絶えている。そこから考えると、この団体は、明治 34 (1901) 年の秋ごろに自然消滅した、ということになるのかもしれない。

期間としては二年ほどだが、団員には多大なる感化を与えた。それから 30 年ののち、昭和 6 (1931) 年 7 月に、博多から京都に向かう列車の中で、たまたま高田は、当時の団員と乗り合わせることになる。それが吉田善吾である。誠友団の話で盛り上がったということが、当時の回想の中に記されている。

1) 「誠友團回顧追録」は、改訂版（高田、1940）において、新たに収録されたものである。

発起人山田陽一は早稲田大学に進学し唐津で新聞記者となった。山田と同じく早稲田に進学するも、早世するのが南里常吉²⁾。他にも、官僚、政治家となった中溝庄三（北海道庁）、中野邦一（岡山県知事）、池田秀雄（前出）、海軍から海軍大臣に上り詰めた吉田善吾、そして小説家、社会教育家である下村湖人など、多士済々である。

最後に挙げた下村湖人は、高田の無二の親友である。進学した第五高等学校において、二人の間柄は急速に深まった。高田は晩年に、下村湖人の全集が刊行されるに際し、全巻の解説を引き受けた。下村の業績は多岐にわたっているだけに、その準備にも、執筆にもそうとうの苦労があったものと想像できる。改めてこの二人の友誼の篤さを思わざるをえない。下村湖人の代表作『次郎物語』を解説するなかで、高田が筆を走らせているのは、やはり二人が同じ時を過ごした、佐賀中学時代を描いた第三部である。下記の文中に出てくる「白鳥会」の朝倉先生が、誠友団の顧問、豊増龍次郎である。

〔下村湖人の小説『次郎物語』〕第三部において重要な役目を演ずるのは朝倉先生である。第二部において中学の先生として登場した朝倉先生は、第三部においても、依然、母校の先生であり、しかも白鳥会の創立者である。この段階における朝倉先生のモデルは、かつて佐賀県選出の代議士であった豊増龍次郎氏である。白鳥会に当るのは、明治三三（一九〇〇）年、佐賀中学の学生の一部が組織しておいた誠友団である。その発起人であり幹事役であった人は、早大を中退して早く他界した。この人からはじめに相談をうけた私〔高田〕ども二、三人が、弁護士であった豊増氏を訪い、組織の次第を述べて、指導と援助とを求めた。当時、氏は三〇代の少壮弁護士であり、参禅の年月すでに長く、風格の高さが目につく人であった。喜んで承諾するとともに、まず居宅の一室を提供して会員の利用に任せ、他方には、犬養毅の親友であった当時の代議士・江藤新作氏（前代議士・江藤夏雄氏はその長男）を顧問として相談されたと思う。当時の会員二〇人足らずの中、存命するものは、吉田善吾氏（前海軍大臣）、中野邦一氏（知事歴任ののち、長き代議士生活）と私など三、四人にすぎぬ。豊増氏は昭和一五、六（一九四〇、四一）年頃病歿、令息に豊増昇氏がある。この誠友団生活の中に吸収したる精神的酵素は、後年、各自の中に醗酵した。『次郎物語』についてはいうまでもない。戦後世帯を混乱から救わんとし、道義再建に挺身する中野氏の心境もまたそうであると思う。（高田、2023、8頁）

片道1時間半の道のりを、5年間、徒歩通学していた高田にとって、勉強と家の手伝い以外に、何かをする余裕などない。唯一の活動といえ、この誠友団での交流であった。

家郷での暮らし、誠友団での人々との交わりによって植え付けられたものが、高田にとっての「精神的酵素」であった。だとするとそれは、どのような形で「醗酵」していったのであろうか。それを一言でいうとするなら、「耐乏」の思想である。最後にこの「耐乏」の思想の「醗酵」の様子を見とどけることにしたい。

2) 高田が20歳ごろに書いたと思われる、「惟時明治三十七年八月二十六日謹みて南里常吉君の霊を祭る君や天性真摯にして」から始まる弔辞が、ある演説指南書の中に、たまたま残されている。高田は南里を「利の爲に迷はず義に非ずむば踏まず」と評している（松原、1909、304～307頁）。

Ⅵ 家郷そして師友が高田に与えたもの

ここでふたたび、第 2 節で触れた論文に立ち返ろう。明治 44 (1911) 年に発表された、高田の「文明の迷妄」である。これは雑誌『藝文』に、「家族の崩壊が社会の団結に及ぼす結果」、「社会的法則に就きて」、「社会科学の研究」に続いて発表された、高田最初期の論文である。その論旨は、高田初期の思想内容を表しているだけではなく、実は生涯にわたる彼の思想の根幹を貫いている、社会観・文明観であるといつて間違いない。初期の人口論から貧乏論、賃金論、そして中期の民族論、さらには、晩年の消費函数に関する議論にまで、その思想は持続している。例によって高田は、遠い昔の家郷でのある出来事より、「醜酔」の過程を説き起こそうとしている。

此論文〔「文明の迷妄」〕を草するまでに私が如何なる思想的立場を築き上げて来たかを述べる必要があらう。私の中學時代は一方に於て學校の課程を追ふて、忠實に勉強をつづける平凡な生徒であつた。他方に於ては多感の文學青年であるとともに、時代の風潮にめざめて、社會思想の萌芽を胸に育成しつつあつた。中學四年の時に讀める一論文は私の胸に「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」といふ古人の一句を刻み込んだ。校友會雜誌に寄せたる長篇論文は貧乏を取扱へるものであつた。中學五年の春には、沈み行く落日を堤防の上から見下して、弱者の爲の一生を思ひ定めようとした。(高田, 1956, 113~114 頁)

夕日によって直観を得たのは、明治 35 (1902) 年 2 月末のこと。高田は 19 歳になっていた。嘉瀬川を並行して流れる祇園川の土手から見た西の空の夕焼け。いつもの帰り道の景色であつた。この日の落日ばかりは、高田には違って見えた。佐賀中學の卒業が間近ということも、当然、あつたことだろう。

私〔高田〕はこれからどんな方針をとつて進むにしても、悔ゆることなく死なう、悔ゆることなく死ぬ道は弱いものの為にすることであると思つた。此夕日の印象は強く私に社会への興味を植ゑつけた。(高田, 1940, 12 頁)

弱者に対して、いったい何ができるのか。そこで高田がゆきついたのが、のちの「耐乏」という考え方である。みなでひとしく「貧乏」になろうというのである。それは普通の意味での貧乏ではなく、「豊かな社会の貧乏論」(吉野, 2005) とでも名づくべきものであつた。高田のいう貧乏とは、つまるところ次のような内容のものであつた。

別に身體を養ふ食物を半分にするといふことでもない。又寒さをしのぐ着物を半分にするといふことでもない。要するに消費節約といふことは、結局我々の生活の中からただ見せる部分を除くといふことである。(高田, 1943, 88 頁)

人に見せるためだけの消費、それはヴェブレンのいう「顕示的消費 (Conspicuous consumption)」である。そうした消費が、すべての人々に行き渡るとしたならば、それはある意味では高田のいう「享樂」の平等ということになるだろう。資本の独占もなく、潤沢な資源があり、廃棄物処理の間

題も環境問題もないと仮定するならば、そうした消費は、許容できるだろう。しかし、現実はそのようにはならない。国土も狭く、資源も乏しいが、それでも世界に伍する社会をめざす日本においては、特にそういう仮定は、非現実的である。かえって「顕示的消費」は、国家の存亡を揺るがしかねない一大事である。そこで高田は、「繁榮」を求める人々とは、真反対の提言を行う。

我々の生活の中に見せると云ふ不必要の部分がある。我々は之を除くことに依つて相共に生活の上の苦しみを逃れることが出来る。それと同時に、そこで初めて國家の要求するところ、民族の要求するところを満して行くことが出来る。生活の爲に使ふものを出来るだけ切り詰めること、これより外には我々の民族の立場を守る道はない。(高田, 1943, 313~314 頁)

これを、アジア太平洋戦争時の統制経済体制、国家総動員体制に追従した言説だととらえてはならない。なぜなら高田は、戦況が緊迫する前の段階でも、あるいは戦後の高度経済成長期においても、かわらず同趣旨の発言を繰り返しているからである。したがって、この「国民皆貧論」³⁾というアイデアは、『貧者必勝』(1940)の戦時下の諸論説文のみならず、力の欲望に基づく優勝模倣を説いた大正時代の『社會學原理』(1919)、そして戦後高度経済成長期の『貧しき日本経済』(1955)へと受け継がれている、彼の根本的な思想であったといえるだろう。戦後の発言も、確認しておく、下記のとおりである。

物の使いかたに二つある。一つはそれ自體役にたつものであり、他の一つは人に誇示するためのものである。我々は人に誇示するもののためにあくせくとしている。(高田, 1955, 204 頁)

「あくせく」とは、どういう語感であろうか。高田の諦念とも、困惑とも、それはとれる。「それ自體役にたつもの」は、十分に社会に行き渡っている。しかし、それでも人間は、生産と付加価値の増大をめざしてやまない。それは、なぜなのか。つまるところそれは、誇示のためである、というのが、高田の本心である。しかし不必要なまでに付加価値をつけることに「あくせく」とする流れを止めることはできない。ようやく高田は晩年になって、その原因に対する最終的な解答を見出す。それが「消費標準の規範性」である。経済的に余裕のあるものは、誇示の消費を行う。それを模倣できるものは模倣し、できないものはうらやむ。そのうらやむ気持ちは、反感や嫌悪という形ではなく、自分もいつかは、誇示の消費をなしうる立場になりたいとの願望に変わる。その結果、誇示のための消費(水準)が目的となる。だが、ひとたびその目的が多くの人に達成された場合には、より高い目標水準が設定されるだけである。この仕組みが、人間の欠乏感と不満感と焦燥感とを生み出しつづける原因となっている。いつまでたっても、人が幸福を手にすることができない理由はここにある。「文明の迷妄」で語られたことが、社会学、経済学を研究しつくしたあとの最晩年の論文において、より整理された形で、ここでも繰り返して述べられている。高田にとっての「精

3) 国民皆貧論に関しても批判は絶えない。例えば竹内謙二は、高田の国民皆貧論が実効性の乏しいことを理由に、「高田氏一流の空想」で「一顧の価値なきものである」と一蹴する(竹内謙二, 1934, 163 頁)など。津村も「總ての人間を總て丸坊主にして、皆一様に紙衣を着せて、粥をすゝらせる」説だと批判する(津村, 1935, 24~31 頁)。

神的酵素」の「醗酵」は、まさにこの部分に現れている。上記の戦後日本経済に対する見解の由来について、高田は次のように述懐している。

根本を貫いているものは、四十餘年に亙る私の宿論であり、三つ子の魂である。農村に生れ田舎の中學に通い、京都に學んでも洋服を着ず、それから世界の新しい思想を吸収しようと思って社會學の新潮を學習したが、やはり、東洋の精神がぬけきれず、社會主義のことを考えようと思って經濟學を學ぶこと約三十年、それでも資本的計算に何の興味をも感じない。人類の行方と日本の行方のみがただ二の關心事である。(高田, 1955, i 頁)

日本の經濟学の礎を築いた高田が、「資本的計算に何の興味をも感じない」、ときっぱりと断言している。この発言の真意は、深刻に受け止めなければならない。高田の經濟学は、いったいどこをめざしているのか。

高田の国民皆貧論は、どうやって經濟を發展させるのかという、經濟成長の考え方からすると、反時代的としか受け止められず、經濟政策論としても、実行不可能な空論というふうにししか理解されないだろう。しかし、立ち止まって考えなければならないのは、經濟發展がもたらされたとしても、貧富の格差がいっこうに縮まることなく、生活満足度も向上しないという現実があるのではないか、ということである。もしそうだとしたら、それを、どのようにして克服できるのであろうか。いや、それどころか、環境問題や資源・エネルギーの枯渇問題などにより、そもそも「發展」という考え方それ自体に対しすら、ナイーブに賛同することができなくなりつつある。こういった現代がわれわれにつきつけている問題を考えるためには、いまだに高田の議論の中に、省みられるべき視点が含まれているように思われる。人類全体の幸福を主眼においた「經濟」について考える場合、高田の国民皆貧論は人類皆貧論として、再浮上させるべき考え方である。

むすびにかえて

異彩を放つ高田保馬の学問と思想は、彼の生まれ育った環境が生んだものだ、というのが本稿の主張である。郷里の田園風景と精神的風土、そこで育まれた親子、兄弟、姉妹の情愛、志を同じくする人々との友情、精神を鍛えてくれる師弟愛、それらが複雑に組み合わさったときに、高田の強烈な個性が完成された。その個性は世界の社会学と經濟学を学び、世界のどこにもない社会学、經濟学を完成させた。高田の学問を、他のものと大きく隔てているのは、彼を根底で規定している、それこそひとつひとつの「細胞の末」にいたるまで染みわたった、弱きもの、小さきものための「耐乏」の思想である。社会学としては高田の生涯最後の論文「定型としての共同社会」に記録された、大著『社會學原理』(1919)を書いたころの心境を綴った一文に、それは凝縮されている。「冬休みに帰郷した折には、ひまあるごとに麦田に餌をあさるからすの大群を見ては群居本能に思いをめぐらしてゐたことを思ひ出す。当時から『人間結合は利益の故にはじまらず、結合自体を求めてはじまり(内的結合)、その上に利益のための結合が加はる』」(高田, 1964, 1 頁)。ここにあるのは、自然と風景と生きとし生けるものすべての暮らしが、混然と一体化することによってできあがった、草花の匂いのする学問と思想である。佐賀県小城郡三日月村の田畑が、高田保馬を生み育てたといっても、何らの誇張はない。

参考文献

- 青山秀夫ほか編『分配理論の研究—高田保馬先生喜寿祝賀記念』有斐閣, 1964年。
- 河村望『高田保馬の社会学』いなほ書房, 1992年。
- 金子勇編『高田保馬リカバリー』ミネルヴァ書房, 2003年。
- 北島滋『高田保馬—理論と政策の無媒介的合一』東信堂, 2002年。
- 下村湖人「校風へのレジスタンス」, 亀井勝一郎編『わが青春記』三笠書房 1955年, 60-63ページ。
- 高田保馬「文明か幸福か」『社会政策学会論叢(第9冊)社会政策より見たる税制問題』同文館, 1916年, 125-138ページ。
- 高田保馬『社会学原理』岩波書店, 1919年。
- 高田保馬「現代文明の迷妄—生産政策の否定」, 『社会学的研究』東京寶文館, 1923年。※改訂版を参照。初出は, 1911年「文明の迷妄」『芸文』第2巻第7号, 43-61ページ。
- 高田保馬『貧者必勝』千倉書房, 1940年。※増補改訂版
- 高田保馬『思郷記』文芸春秋社, 1941年。
- 高田保馬『民族耐乏』甲鳥書林, 1943年。
- 高田保馬『洛北雑記』大丸印刷, 1947年。
- 高田保馬「学問の旅—学究の自叙伝-1」『経済』第3巻第1号, 経済社, 1949年。
- 高田保馬『耐乏夜話』実業之日本社, 1950年。
- 高田保馬『学問遍路』東洋経済新報社, 1957年。
- 高田保馬「校歌回想」『財政』第19巻第12号, 大蔵財務協会, 1954年。44-47ページ。
- 高田保馬『貧しき日本経済』日本評論新社, 1955年。
- 高田保馬「私見の展覧系譜」『消費函数の研究(大阪大学経済学部社会経済研究室研究叢書 第5冊)』有斐閣, 1956年。
- 高田保馬「定型としての共同社会」『ソシオロジ』第11巻第1-2号, 1964年, 1-10ページ。
- 高田保馬(吉野浩司・牧野邦昭編)『高田保馬自伝「私の追憶」』佐賀新聞社, 2022年。
- 高田保馬(吉野浩司編)「高田保馬の下村湖人論」『研究紀要』(鎮西学院大学地域総合研究所)第21巻第1号, 2023年, 2-44ページ。
- 高田保馬博士追想録刊行会編『高田保馬博士の生涯と学説』創文社, 1981年。
- 竹内謙二『日本経済の不安性—現経済機構の改造と貿易政策の転換』千倉書房, 1934年。
- 津村秀松『平等を求むる心』宝文館, 1935年。
- 野口隆『巨星高田保馬先生』くらすなや書房, 1999年。
- 松原玄波『最新演説典範』井上一書堂, 1909年。
- 吉野浩司「豊かな社会の貧乏論—高田保馬と河上肇」『一橋研究』第30巻第3号, 2005年, 35-52ページ。
- 吉野浩司「昭和初期の東アジア共同体の構想—高田保馬の非対称性の民族論」『ソシオロジ』第50巻第3号, 2006年, 21-37ページ。